

■無形文化遺産とは？

「文化遺産」という言葉には、遺跡や遺物などだけではなく、祖先から代々と伝わってきた伝統や表現、技術なども含まれています。これらは無形文化遺産と言われるもので、手で触れられませんが、人類の文化遺産の重要な部分です。

無形文化遺産は、絶えず再現され、人間が環境に適応していく中で発展していきます。無形文化遺産は人々に自らの文化に対する同一性や帰属意識などを思い起こさせてくれるものです。

無形文化遺産の創造と伝承において、中心的な役割を担っているのは人そのものです。そして、人間がつくる社会や集団における無形文化遺産の共有は、他者に対する尊重と理解を高め、その社会の団結力を強めることができます。一方、異なる無形文化遺産を学ぶことで、他者に対する尊重と文化間の対話が促進されていきます。

ユネスコの「無形文化遺産の保護に関する条約」（2003年10月採択。詳しくは別のパネルで説明します）では、無形文化遺産の定義を下記のように記しています。

無形文化遺産とは、慣習、描写、表現、知識及び技術並びにそれらに関連する器具、物品、加工品及び文化的空間であって、社会、集団及び場合によっては個人が自己の文化遺産の一部として認めるものをいう。この無形文化遺産は、世代から世代へと伝承され、社会及び集団が自己の環境、自然との相互作用及び歴史に対応して絶えず再現し、かつ、当該社会及び集団に同一性及び継続性の認識を与えることにより、文化の多様性及び人類の創造性に対する尊重を助長するものである。



【インドの無形文化遺産】 ラマン：インドのガルワール ヒマラヤの宗教的祭事と儀式的演劇（左下は演劇用の仮面）

©UNESCO/ Arvind Mudgil

■無形文化遺産には、 どんなものがありますか？

「無形文化遺産の保護に関する条約」では、無形文化遺産は次の5つの分野に区分されて示されています。

- (1) 口承（こうしょう）による伝統及び表現
（無形文化遺産の伝達手段としての言語を含む。）
- (2) 芸能
- (3) 社会的慣習、儀式及び祭礼行事
- (4) 自然及び万物に関する知識及び慣習
- (5) 伝統工芸技術

ただし、条約の解釈によると、無形文化遺産には、ただ一つの特徴だけではなく、複合的な要素を持つものが多く存在します。例えば、宗教的な儀式には、伝統音楽や踊り、歌という表現が使われ、儀礼用の衣装と器具が不可欠です。さらに、その儀式は、人々の自然界に対する認識や知識を反映するものでもあります。儀式や祭りは、無形文化遺産の複合的な表現と言えます。

また、各分野間の境界は常に流動的であり、国やコミュニティにより、同じ案件に対する分野区分が違うこともしばしばあります。従って、上記の五つの分野は厳格に区分されたものではありません。

それでは、各分野について、少し詳しくご紹介します。



【イラン・イスラム共和国の無形文化遺産】
イラン音楽のラディーフ(5分野全ての特徴を持つ)